

別頭の丘

渡邊信覺

捨て小舟汝が身は波を出でぬまに

夕陽入りにし別頭の丘へ

六老の畑は草になりにつけり

浮き雲迷ふ夏の日のもご

荒磯の沖に漁火ゆかしくて

闇に祈りぬわれとことばに

ねぐらには子をのこさずや東路へ

夜明の空を鳥鳴き行く

故郷にて

櫻庭司一

晴れし日の田舎の道を通り行く

人の姿の秋らしきかな

黄昏に川邊に立てばうら淋し

木の葉の落ちて流れゆく秋

とうきびの葉すれの音のさや／＼と

空高くして月はすみけり

詩歌

西谷にて

櫻庭是實

古杉や昔を語る祖師の跡

法の山佛法僧に月さえて

勤行

朝風の身にしむ秋や法の山

法衣きて僧の行きけり朝かすみ

太鼓うつ人の姿や秋深し

秋日和

杉本寒風

初秋や繪馬堂裏の子守唄

秋の暮

赤蜻蛉宙に飛び交ひ夕日射す

落葉踏む駒の蹄や秋深し

弦月の牙たる夜や秋寒し

ちらくと枯葉落ち行く秋の暮

秋の田園

生き／＼と田園に遊ぶ小鳥かな

成田達也

山の寺蟬さはがしき日暮かな

宵の口まつむし涼し草のかげ

鬼ごつて逃げる子達の朗がらかさ